† 1 †

「――――！」
雲雀恭弥のトンファーが山本武の刀を外に弾き、彼の喉元でピタリと止まった。
「――――ッ」
金属の冷たい感触が山本の体温を僅かに低下させる。
「……」
そして、この先行われることが彼を気鬱にさせた。
「僕の勝ちだよ」
「……あぁ」
ここ半年ほど、雲雀と山本は余人を立ち合わせず勝負を行ってきた。
それは、いつだって雲雀から仕掛けられる。

そもそものキッカケは――――

――――半年前。

深夜、山本は『仕事』を終えて後、ボンゴレ本部へ報告をするため出向いた。
僅かに手傷を負ったのか、闇に溶け込むはずの黒服から濁った赤色が垣間見える。
ボンゴレに二大剣豪ありと言われるほどにまでなった彼に傷を負わせられる者など、滅多にいないというのに、毎回、彼は何がしかの傷を作ってきた。
まるで、無傷で人を斬るのは嫌だとでも言うかのように。
そうした懸念を抱いた10代目の問い掛けに、山本は勿論否定を返したけれど。
今夜の標的も山本が梃子摺るような者達ではなかった。
彼ならば、余程のことでもない限り、手傷どころか返り血の一滴も浴びずに処理出来ただろう。
事実、傷は負ったものの山本の衣服に相手の血は全く着いていない。

「――――山本武」
「……ヒバリ？」
歴史を感じさせる重厚な扉から退出し、廊下を進んでいると柱の影から細身の男が現れた。
男の名は雲雀恭弥。ボンゴレ雲の守護者だ――一応は。
彼の立場は一概にそうと言い切ってしまえるものではなかったが、対外的にはそういうことになっている。
その証拠に、深夜ボンゴレ本部を徘徊していても誰何されることもない。
雲雀は『雲』という呼び名に相応しく、捕らえどこのない存在だった。

――――これまでは。
いつの頃からだったろう。彼は雲から派生する雨に興味を抱いてしまった。
そして、今夜、雲雀ははっきりと形作られた感情に従い、行動にでたのだ。

「また、怪我をしたの」
「ハハ、ちょっと、な」
「あんな雑魚相手に何やってるんだい」
「そうでもなかったけど」
「君なら瞬殺できただろう」
「――――」
まるで見てきたかのように言う雲雀に、山本は口を閉じた。
どう答えても雲雀の舌鋒からは逃れられそうにない。
「僕のものに勝手に傷を増やさないでくれないか」
「……は？」
「君は僕のものだ」

「ヒバリー、何言ってんだ？　いつ、俺がヒバリのものになったんだよ？」
「今」
「――――!?」
キッパリと宣言されて、山本は絶句した。
「僕がそう決めた。反論は認めないよ」
「そー言われても……」
ガリガリと山本は困惑も露に短い黒髪を掻く。
「急にどうしたんだ？」
「急にじゃないよ――――前から君のことは気になって見ていた」
「――――え？」
「草食動物の群れに紛れ込んだ君に違和感を覚えたのがそもそものはじまりかな」
それで、何となく好奇心から山本を観察しはじめた。
群れの中にいて、彼はいつも笑っていた。
楽しそうに、他人を和ませるような笑顔で。
でも、時折、彼は輪を外れて独りになることがある。

そんな時、彼の顔から笑みは剥がれ落ち、酷く平淡な表情で遠くをぼうっと見ていた。
親友や仲間といる時とは全く異なり、全てを拒絶するような雰囲気を漂わせて――――。
その落差が更に雲雀の興味を引く。
その後、観察は日常生活だけには留まらず、戦いの場でも行われた。
よくよく注意してみていると、山本の戦い方は酷く不安定なものだった。
一見すると、とても力強く圧倒的とすら言えるのに、刹那的に酷く儚げな印象を纏うことがあるのだ。
それは本当に0・1秒にも満たない一瞬のことで、気づく者は皆無に等しかったけれど。

「君はなかなか興味深い生き物だ」
「ヒバリほどじゃないのなー」
おかしな空気を払拭するかのように、殊更軽い調子で混ぜっ返す。
「だから、僕はもっと君を知りたくなった――――もっと近くで」